〔博士論文概要〕

（発達障害児の母親ときょうだいが経験する心理的困難に関する研究）

平成 27 年度

鈴　村　俊　介

筑波大学大学院　人間総合科学研究科
生涯発達科学専攻

はじめに

近年、障害児を養育する親だけでなく、きょうだいの経験する困難、きょうだいへの支援についても注目が集まりつつある。健常児および発達障害児を養育する親ときょうだいが経験する困難について先行研究を通覧した結果、1. 家族成員の属性、2. 家族成員間の関係、3. 家族システムの機能が、親ときょうだいの心理的困難に影響することが明らかになった。なかでもきょうだいによる母親サポート、親が子どもごとに態度や期待を変える Parental Differential Treatment (以下 PDT)、発達障害児からきょうだいに向けられる不適切な言動・行動、および家族機能が母親ときょうだいの心理的困難に与える影響については資料の蓄積が不十分であった。本研究の目的は発達障害児の母親ときょうだいの心理的困難に影響を与える諸要因を明らかにすることである。

研究 1　高機能広汎性発達障害を伴う幼児の母親に生じる心理的困難についての予備的検討

【目的】発達障害児養育の最小単位である母親と発達障害児の組み合わせに焦点を当て、発達障害児を養育する母親の心理的困難への影響に関して、母親および発達障害児の属性、家族の構造的要因がもつ相対的重要性を明らかにする。

【対象と方法】3-6 歳の広汎性発達障害児 35 名の母親 35 名に質問紙記入を依頼した。尺

度として母親については、PSI 育児ストレスインデックスを、発達障害児については通常の知能・発達検査のほかに、広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度(以下、PARS)を用いた。

【結果】発達障害児を養育する母親の抑うつ・不安は、母親の属性（年齢・教育水準)、発達障害児の属性（月齢・知能水準・障害特性）や家族の構造的要因より、母親による子どもの情緒・行動の評価に影響されていた。

【考察】母子の属性や家族の構造的要因ではなく、母親が発達障害児の情緒・行動上の問題をどう体験しているかが、育児ストレスを考えるうえで重要と思われた。

研究 2　高機能広汎性発達障害を伴う幼児の母親に生じる心理的困難の検討

【目的】発達障害児の情緒・行動上の特徴と父親による母親サポートが母親の心理的困難に対して与える影響を明らかにする。

【対象と方法】3-6 歳の高機能広汎性発達障害児の母親 30 名に質問紙記入を依頼し、結果を対照群 51 名と比較した。尺度として母親について は K6 日本語版、育児ストレスショートフォームの夫に関する 2 項目を、児童については通常の知能検査のほかに PARS と The Strengths and Difficulties Questionnaire (以下、SDQ) の Total Difficulties Score (以下、TDS)を用いた。

【結果】臨床群の母親の K6 得点（抑うつ・不安）は対照群の得点より有意に高かった。重回帰分析の結果、児童の情緒・行動上の問題と夫との問題は母親の抑うつ・不安に正の影響を与えていた。

【考察】高機能広汎性発達障害児を養育する母親の抑うつ・不安は、児童の情緒・行動上の問題と夫との関係に影響を受けていた。年齢層を拡大し、広汎性発達障害以外の発達障害を含む大規模な調査研究が必要と考えられた。また夫以外の家族成員としてきょうだいも含む研究デザインが望ましいと思われた。

研究 3　発達障害児の母親ときょうだいに生じる心理的困難の質的検討と分析モデルの生成

【目的】仮説モデル生成のための基礎資料を得てモデルを生成する。

【方法】発達障害児の母親に対して半構造化面接を行った。面接は(1) 発達障害児による、きょうだいに対する不適切な行為 (2) PDT (3) 発達障害児を養育する母親へのサポート-

に焦点を当てた。

【結果】面接記録を参照して素データを作成し、KJ 法を援用して意味のあるカテゴリに分類した。クロス表を作成し数量化理論 III 類を用いて解析を行った。問題行動の激しい発達障害児に動揺する家庭、家族関係が良く安定している家庭、父親や周囲の理解に恵まれず、きょうだいが家族の調整役割を果たす家庭、の 3 群が抽出された。

【考察】発達障害児からきょうだいへの不適切な言動・行動、PDT に対する否定的感情、母親のきょうだいへの配慮、父親の育児参加など、発達障害児を養育する母親やきょうだいの心理的困難に影響を与える要因を確認できた。この結果をもとに仮説モデルを生成した。

研究 4　発達障害児の母親の心理的困難についての実証的研究

研究 3 で生成した仮説モデルをもとに、質問項目を選定して保護者向け・きょうだい向けの質問紙を作成した。児童精神科外来通院歴のある発達障害患者 1,980 名に質問紙を郵送し、返送された回答を分析した。記入した母親は 436 名、そのうち子どもが二人以上いる者は 289 名であった（159 名のきょうだいが質問紙記入に同意した）。データを分析し、結果を研究 4、研究 5、研究 6 で報告した。

分析 4-1　発達障害児を養育する親にみられる PDT

【目的】発達障害児を養育する家庭での PDT の実態を明らかにする。

【結果】質問項目から作成した PDT に関する尺度（「障害児への肩入れ」「きょうだいへの配慮」）をもとにデータを分析した。両親を比較すると「肩入れ」「バランスへの配慮」ともに母親の得点は父親より高かった。発達障害児が 6-12 歳の場合と、きょうだいの年齢が 13 歳以上だと「障害児への肩入れ（母親）」が高くなっていた。きょうだいの年齢が 6-12 歳だと「バランスへの配慮（母親）」が高かった。総じてきょうだいが年上だと「障害児への肩入れ（母親）」が高くなっていた。

【考察】PDT は発達障害児の年齢、きょうだいの年齢、両者の長幼関係に影響を受けるものと思われた。

分析 4-2　発達障害児の母親の経験する心理的困難

【目的】母親の抑うつ・不安に影響する要因を検討する。

【結果】質問項目から作成した PDT・父親のかかわり・父親による母親サポート・きょうだいによる母親サポート・家庭外からの母親サポートに関する尺度を用い、K6 得点を目的変数とする重回帰分析を施行した。発達障害児の問題行動が重篤な群では問題行動への適切な対処・父親による対話を介したサポート・きょうだいによる行動を介したサポートが母親の抑うつ・不安に負の影響を与え、問題行動と「発達障害児への肩入れ（母親）」が正の影響を与えていた。問題行動が軽微な群では問題行動への適切な対処が負の影響を、「きょうだいへの配慮（母親）」と「きょうだいは我慢が多い」が正の影響を与えていた。

【考察】発達障害児の問題行動が重篤な場合、父親やきょうだいがサポートすることで母親の心理的困難が軽減されることが推測される。問題行動の重さによって、母親に負担となる PDT 関連行動が異なっていた。

研究 5　発達障害児のきょうだいの心理的困難についての実証的研究

分析 5-1 発達障害児のきょうだいに対する不適切な言動・行動

【目的】発達障害児のきょうだいに向けた不適切な行動の実態を明らかにする。

【結果】不適切な言動・行動（「ばかにする」「からかう、いじわるを言う」「押す、小突く」「たたく、ける」「いやがることをする」）について母親に問うた。どの項目についても 4 割以上が「ある」と答えていた。発達障害児の年齢が 6-12 歳の場合、他の群よりも意図的な身体的攻撃が多かった。診断別にみると注意欠如多動性障害児は他の障害に較べて不適切な言動・行動が多かった。きょうだいの年齢層でみると、あらゆる項目で 6-12 歳群が 13 歳以上群よりも得点が高かった。両者の長幼関係で見ると、きょうだいが年下の群が年上の群よりも得点が高かった。

【考察】発達障害児のきょうだいへの不適切な言動・行動は、きょうだいが 6-12 歳のとき、あるいは発達障害児より年下のとき多く見られており、臨床的な実感と一致した。

分析 5-2　発達障害児のきょうだいが経験する心理的困難

【目的】発達障害児のきょうだいの心理的困難に影響する要因を明らかにする。

【結果】きょうだいの経験するストレス、きょうだいの発達障害児への感情・母親のきょうだいへの配慮、発達障害児の行動へのきょうだいの不快感、家庭の内外からのきょうだいサポート・家族の情緒的つながり、家族のコミュニケーションの良さに関する尺度を用いデータを分析した。きょうだいが 6-12 歳の群では障害児への否定的感情が他の群より高

かった。母親によるきょうだいサポート得点ときょうだいの経験するストレスとの間に負の相関が、教師や友人によるサポート得点と障害児への否定的感情との間に負の相関が認められた。共分散構造分析の結果、きょうだいを支える家族は発達障害児の不適切な言動・行動にきょうだいが抱く不快感に負の影響を与え、発達障害児の不適切な言動・行動にきょうだいが抱く不快感はきょうだいの発達障害児への否定的感情への正の影響を介して、きょうだいの全般的な不適応に正の影響を与えていた。発達障害児の不適切な言動・行動にきょうだいが抱く不快感からきょうだいの全般的な不適応への有意な影響は認められなかった。

【考察】きょうだいは発達障害児に不適切な言動・行動を向けられると否定的感情は高まるが、つねに全般的な不適応を起こすわけではないと考えられた。母親による配慮や家庭の良い雰囲気を保つことが、きょうだいの心理的健康にとって重要と思われた。

研究 6　発達障害児の母親ときょうだいの心理的困難についての実証的研究

【目的】発達障害児の母親ときょうだいの心理的困難を明らかにする。

【結果】母親ときょうだいの同じ質問項目に対するペア分析では、きょうだいは母親が思っている以上に心理的攻撃が多いと評価し、母親はきょうだいが思っている以上に発達障害児の身体的攻撃にきょうだいが不快感を抱いていると評価していた。共分散構造分析では、きょうだいを支える家族は、発達障害児の不適切な言動・行動にきょうだいが抱く不快感ときょうだいの全般的な不適応に負の影響を与えていた。

【考察】達障害児による身体的攻撃のような目に見える不適切な行動には反応するが、心理的攻撃は見落としやすいものと思われた。不適切な言動･行動に母親が気づいていると、発達障害児の不適切な言動・行動にきょうだいが抱く不快感は減ることが予想された。家族がきょうだいを十分に支えているときょうだいの心理的困難が高まらないことが推測された。

まとめ

　本研究によって以下のことが明らかになった。

1. 適切に発達障害児の問題を処理できていると思うと母親の心理的困難は軽減する。

2. 母親の心理的困難は、発達障害児の問題行動が重篤な場合、父親による対話を介したサポートにより軽減される。

3. 母親の心理的困難はきょうだいによる母親サポートによって軽減される。

4. 親の PDT は発達障害児の年齢・診断、きょうだいの年齢、両者の長幼関係に影響を受ける。母親によるきょうだいへの配慮は家庭の良い雰囲気を介して間接的にきょうだいの良好な適応に影響する。

5. 発達障害児からきょうだいへの不適切な言動・行動は、発達障害児の年齢・診断、きょうだいの年齢、両者の長幼関係に影響を受け、きょうだいの発達障害児への否定的感情に正の影響を与えるが、きょうだいの適応に直接影響を与えない（ただし問題行動が高度な場合は与える）。

上記の知見が臨床場面、啓発活動で生かされ、発達障害児の家族サポートが充実することが望ましい。